

ことばの科学研究センター活動報告

吉 田 和 彦*
 梶 茂 樹***
 加 野 まきみ**
 北 上 光 志*
 鈴 木 孝 明*
 島 憲 男*
 森 博 達****

要 旨

ことばが内包する世界は奥深い。総合学術研究所ことばの科学研究センターの目的は、日本語を含む世界の諸言語を共時的・通時的に研究し、21 世紀におけることば学の新たな可能性を追求することにある。本報告では、令和 4 年度における本センターの研究成果について概説する。

キーワード：記述言語学，比較言語学，統語論，テキスト言語学，心理言語学，コーパス，文化交渉史

1. ことばの科学研究センターの概要

ことばの科学研究センターは、令和 2 年 4 月 1 日に総合学術研究所に設置された。本研究センターの目的は、本学の言語・文学の研究者を結集し、また学外の研究者の協力を得て、日本語を含む世界の言語と文学に係る諸問題を研究し、21 世紀におけることば学の新たな可能性を追求すると同時に、言語と文学に係る多元的な研究を展開することにある。世界には文字のある言語と文字のない言語がある。言語に文字があれば、通常その言語で書かれた 文献がある。しかし文字のない言語には文献がない（ただ他言語話者がその文字で何らかを書き留めることはある）。言語の通時的研究は、過去の文献を持つ言語では行いやすいが、文字がなく文献のない言語でも可能である。それは、現時点での共時的記述を行い、記述対象言語の比較研究により言語の歴史を再構成することができるからである。世界には文字のない言語が多く、むしろこういったやり方を取らざるをえない場合が多い。通時の研究としては、文献のある印欧比較言語学や漢語の歴史的研究などが進んでいるが、その経験と、

* 京都産業大学外国語学部

** 京都産業大学文化学部

*** 京都産業大学現代社会学部元教授

**** 京都産業大学名誉教授

文字がなく文献のない言語の通時的研究との共通性と相違点を認識し、両者を合わせた総合的研究が必要である。こういった研究はまだ行われていない。

同時に、言語の共時的記述が研究のベースとなるため、個別言語の語彙、文法、テキストの地道で緻密な研究が必要となる。さらに、研究において重要な役割を果たすテキスト理解のために、文学、歴史学などとの協同も必要である。また、ヒトの言語産出と理解、およびこれらの獲得に関する仕組みの理解のもとに研究を行うことは、本研究プロジェクトの大きな特徴である。世界には、印欧語族、シナ・チベット語族、オーストロネシア語族、ニジェール・コンゴ語族など幾つもの語族 (language family あるいは phylum) が存在し、言語としての一般的な共通性を保ちつつも、類型論的構造や歴史が異なる。従って、まず共同研究では、それぞれの研究者が取り組んでいる言語の構造的特徴を対照言語学的に明らかにし、その研究法を開示する。そして、それが他言語の研究にどういう意味を持つかを考察し、その研究法の新たな発展の可能性を探る。さらに、様々な系統的に異なる、あるいは系統的には同じではあっても構造の異なる言語の研究において、その共時的研究のみならず通時的研究においても、研究方法がどう共通してどう異なるかを明らかにする。また、様々な研究におけるテキストの価値、有効性なども明らかにする。

2. 研究体制

本センターは、京都産業大学外国語学部、文化学部 に所属する教員を学内メンバーとし、また 学外メンバーとして森博達京都産業大学名誉教授 (元外国語学部教授) と梶茂樹 (元現代社会学部教授) を加えている。それぞれの所属や専門、本センターにおいて果たす役割は以下の通りである。

吉田和彦 (外国語学部客員教授)

研究の総括, 印欧語比較言語学

梶 茂樹 (現代社会学部元教授)

記述言語学, アフリカ諸語研究学

加野まきみ (文化学部教授)

コーパスを活用した英語学研究

北上光志 (外国語学部教授)

テキスト言語学の観点からのロシア語アспект研究

鈴木孝明 (外国語学部教授)

心理言語学研究

島 憲男 (外国語学部教授)

ドイツ語構文とテキストの研究

森 博達 (名誉教授)

中国語学・日本語学・朝鮮語学, 東アジア語文交渉史の研究

3. 本年度の研究会

本年度は4月23日にことばの科学研究センター会議を開催し、本年度の活動方針を決定した。その方針にしたがって、6回の研究会と1回の講演会を開催した。以下その内容の要旨を報告する。

令和4年度第1回研究会

日時：令和4年5月25日（水）15:00～17:00

場所：第3研究室棟会議室およびTeamsによるオンライン開催

発表者及びテーマ：梶茂樹「目的語関係節と when 従属節が同じであることについてーニョロ語からの考察ー」

ウガンダ西部に話されるバンツー系のニョロ語について、目的語関係節と when 従属節とが同じであることを示す。正確には、when 従属節とは目的語関係節の一部であるということである。ニョロ語ではテンス・アスペクト・ムードによる1つの活用において、基本形（主節）、主語関係節、目的語関係節、when 従属節、if 従属節の5つの動詞形を区別しなければならない。例えば英語では、基本形 he reads a book, 主語関係節 a person who reads a book, 目的語関係節 a book which he reads などのように5つの動詞形は同じになるが、ニョロ語では原則異なる。そしてその違いは主として声調によって示される。しかしニョロ語で確認されたすべての活用において、目的語関係節と when 従属節の動詞形は同じ形を取るのである。日本語でも「彼が読むもの」と「彼が読むとき」はどちらも連体修飾である。

令和4年度第2回研究会

日時：令和4年6月29日（水）15:00～17:00

場所：第3研究室棟会議室およびTeamsによるオンライン開催

発表者及びテーマ：森博達「上代の漢文ー正格と変格ー」

「上代」は飛鳥時代から奈良時代までを指す。文章は漢字のみで綴られていた。漢字文化が日本で受容されると、漢語・漢文の和化も始まる。当時の漢字文は和化の有無・濃淡などによって、正格漢文・変格漢文・漢化和文・和文に四分できる。変格漢文には、朝鮮変格漢文や仏教漢文の要素も混在する。

今回はまず、前史として古墳時代の埼玉稲荷山鉄剣銘から始め、飛鳥時代の「三経義疏」、奈良時代前半の『古事記』『日本書紀』および「風土記」を取り上げて概説し、多様な文章の性格を評定する。つぎに、奈良時代後半の『懷風藻』（751年序）・『藤氏家伝』（760年頃）・『唐大和上東征伝』（779年）を取り上げて、やや詳しく文章を検討し、倭習や仏教漢文を摘出する。

『藤氏家伝』の上巻「鎌足伝」（仲麻呂撰）は『日本書紀』を参照しており、決定的な誤用（倭習）まで襲っている。また下巻「武智麻呂伝」（延慶撰）ともども仏教漢文が混在する。「東征伝」（元開＝淡海三船撰）は基本的に平易な正格漢文で綴られているが、倭習や仏教漢文も混じる。『藤氏家伝』

と『東征伝』は今回が初探であるが、当時の漢文作成の水準や性格が窺えて興味深い。

令和4年度第3回研究会

日時：令和4年7月27日（水）15:00～17:00

場所：第2研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：吉田和彦「アナトリア祖語とモーラ」

話し手のいない文献言語から、プロソディーについての情報を引き出すことは決して容易でない。プロソディーについての情報が文字によって書き残されていることはまれであるからである。しかしながら、文献言語の場合においても、プロソディーについての情報を導き出すことは決して不可能ではない。本発表では、ヒッタイト語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語などの共通基語であるアナトリア祖語において、アクセントを担う基本的な単位が音節ではなく、モーラであったことを歴史比較言語学的な観点から示したい。

令和4年度第4回研究会

日時：令和4年9月28日（水）15:00～17:00

場所：第2研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：北上光志「19世紀後半から20世紀末までのロシアと日本の文学作品における発話表現の比較」

前回（2021年10月20日）の研究発表では、19世紀から20世紀に書かれたロシアの文学作品における動詞と分詞のアスペクトに関するテキスト言語学的特徴を直接話法構文との位置的關係から通時的に明らかにした。このことに関して、今回はロシアと日本の文学作品における発話表現（「登場人物の発話文」と「地の文」の組み合わせパターン）を比較し、両言語の違いとその原因を考察する。従来の研究では、こういった点がまだ明確にされていない。

令和4年度第5回研究会

日時：令和4年10月19日（水）15:00～17:00

場所：第2研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：加野まきみ「既存語と借用語の使い分けーコーパスで探ることばの変化（2）」

昨年の発表に引き続き、様々なコーパスを使って、英語に借用された語が英語の中でどのような変化を経て英語の語録として定着していくのかを観察した結果をお話します。今回は、日本語から英語に入った借用語と既存語彙との競合・共存・棲み分けの様子に注目したいと思います。

令和4年度第6回研究会

日時：令和4年11月30日（水）15:00～17:00

場所：第2研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：島憲男「構文と「知覚者」：宮沢賢治のドイツ語訳テキストからの用例を中心に」

本発表はドイツ語の構文をいくつか取り上げ、当該構文間の共通性・関連性を横断的に捉えることを目的とする。具体的には、前回の研究発表以降に発表者が考察してきたことを中心に構文間の関係・関連性について考えてみたい。前回の研究発表では、独訳された宮沢賢治の複数の作品から収集した例文を用いて、発表者によるこれまでの構文研究の成果を検証するとともに、新たな展開の可能性も提示したが、今回はそこでの知見に基づき、それぞれの構文をどのように関連づけ、構文間に観察される「共通・共有項目」をどのように位置付けすることができるのかを提示したいと考えている。

京都産業大学ことばの科学研究センター開設記念講演会

ことばの不思議～日本語と世界の言語～

令和4年12月4日 京都産業大学むすびわざ館ホール

プログラム

13時20分

開会の辞 吉田和彦（京都産業大学外国語学部教授，ことばの科学研究センター長）

祝辞 大城光正（学校法人京都産業大学理事長）

13時30分～15時30分

講演1「実験で探る子どものことば」

鈴木孝明（京都産業大学外国語学部教授）

子どもはどのようにして「ことば」を身につけるのでしょうか。頭の中で何が起こっているのか、日本語を母語として獲得する子どもを対象とした実験についてのお話をします。

講演2「復元音で読む日中の古典 — 卑弥呼から徒然草まで —」

森博達（京都産業大学外国語学部名誉教授）

昔の音韻やアクセントを復元し、高校の「古典」教科書に見える作品などの一節を声に出して読みます。卑弥呼から『徒然草』まで復元音で日本語の歴史を辿り、日本語のみならず、唐詩も当時の標準中国音で朗読します。

講演3「英語の中の日本語 — 借用と変化のプロセス —」

加野まきみ（京都産業大学文化学部教授）

英語の中には日本語が元になっている借用語があります。それらがいつ借用され、どのような変化の過程を経て英語の語彙として定着するのかを、辞書の初出例やコーパスから抽出した最新の用例を交

えて論じます。

休憩

15 時 40 分 ～ 17 時 00 分

講演 4 「宮沢賢治の作品から考える日本語とドイツ語の『擬音語・擬声語』表現」

島憲男（京都産業大学外国語学部教授）

ドイツ語に翻訳された宮沢賢治の短編作品を用い、日本語の「擬音語・擬声語」がドイツ語ではどのように解釈され、表現されているかを紹介しながら、これらの表現がドイツ語文の中で果たしている「重要な役割」について考えます。

講演 5 「19 世紀後半から 20 世紀末までの日本とロシアの文学作品における会話表現の比較」

北上光志（京都産業大学外国語学部教授）

明治以降、西洋の小説が一気に日本語に翻訳され、ロシア文学は日本文学に大きな影響を与えました。小説における会話表現に注目し、両言語の表現形式の違いに文化的な歴史背景がどのように関わっているかを明らかにします。

17 時 00 分

閉会の辞 梶茂樹（前京都産業大学ことばの科学研究センター長）

4. まとめ

今年度は新型コロナウイルスの沈静化傾向により、海外でのフィールドワークや学会発表を実現することができた。一方でことばの科学研究センターの国内での活動は引き続き活発に行った。6 回開催した研究会ではことばをめぐるさまざまな問題について忌憚のない意見交換がなされた。また 12 月にむすびわざ館ホールにおいて開催した講演会は、対面形式であるにもかかわらず、一般市民も含めて多くの参加者があった。今年度の研究成果は、以下に示されているように、著書 1 点、8 編の研究論文が公刊され、15 件の研究発表が行われた。来年度は記述と文献による言語の総合的研究を目指す本研究センターとしては、活動を一層活発化させ、本学における教育・研究に寄与していきたい。

5. 研究成果

(1) 著書

1. Kaji, Shigeki. 2023. *A Rukiga Vocabulary*. Shoukadoh for the Center for Language Studies, Kyoto Sangyo University.

(2) 学術論文

1. 梶茂樹 2023 「目的語関係節と when 従属節が同じであることについてーニョロ語からの考察ー」『京都産業大学総合学術研究所所報』17号. pp.61-99. 査読無
2. 梶茂樹 2023 「英語について思うこと」『京都産業大学総合学術研究所所報』17号. pp.101-107. 査読無
3. Китадзе, Мицуси 2022. “Сопоставление форм диалога в русских и японских литературных произведениях” *The American scholarly journal Cross-Cultural Studies: Education and Science (CC&ES)* Vol.7, Issue 2, pp.24-35. 査読有
4. Kitajo, Mitsushi 2023. “Verbs of non-speech in dialogue forms of Russian novels” *The American scholarly journal Cross-Cultural Studies: Education and Science (CC&ES)* Vol.8, Issue 1, pp.58-72. 査読有
5. Китадзе, Мицуси 2023. “Чужеродность русских причастных оборотов, деепричастных оборотов и конструкции прямой речи с точки зрения семантической переходности”『京都産業大学総合学術研究所所報』17号. pp.11-25. 査読無
6. 島憲男 印刷中「構文の機能的役割：宮沢賢治のドイツ語訳テキストを手がかりに」『京都産業大学総合学術研究所所報』17号. pp.27-59. 査読無
7. 鈴木孝明 2023 「第二言語習得における束縛現象ー生得的言語知識と帰納的学習ー」『第二言語習得研究の科学3 人間の能力』大瀧綾乃・須田孝司・中川右也・横田秀樹（編）東京：くろしお出版. pp.103-121. 査読無
8. Yoshida, Kazuhiko “The Origin of the Indo-European Thematic Present” *The Journal of the Linguistic Society of Japan* 162. 2022. pp.119-144. 査読有

(3) 研究発表

1. 梶茂樹「目的語関係節と when 従属節が同じであることについてーニョロ語からの考察ー」京都産業大学ことばの科学研究センター令和4年度第1回研究会. 京都産業大学. 2022年5月25日
2. 梶茂樹「英語の語彙力を高めるための2つの提案」日本学会議言語・文学委員会 文化の邂逅と言語分科会（第25期・第6回）. オンライン. 2022年7月17日
3. Kano, Makimi “Corpus Linguistics for English Teachers.” 2022年度KSU英語教育研究会. オンライン
4. 加野まきみ「既存語と借用語の使い分け コーパスで探ることばの変化（2）」京都産業大学ことばの科学研究センター令和4年度第5回研究会. 京都産業大学. 2022年10月19日
5. 加野まきみ「英語の中の日本語ー借用と変化のプロセスー」京都産業大学ことばの科学研究センター開設記念講演会「ことばの不思議～日本語と世界の言語～」. 京都産業大学 むすびわざ館. 2022年12月4日
6. Gobel, Peter and Makimi Kano “Task-Based Language Teaching and Technology: Attitudes and Solutions” Thailand TESOL International Conference. Bangkok, 27 - 28 January 2023
7. 北上光志「19世紀後半から20世紀末までのロシアと日本の文学作品における発話表現の比較」京都産業大学ことばの科学研究センター令和4年度第4回研究会. 京都産業大学. 2022年9月28日
8. 北上光志「19世紀後半から20世紀末までのロシアと日本の文学作品における発話表現の比較」京都産業大学ことばの科学研究センター開設記念講演会「ことばの不思議～日本語と世界の言語～」. 京都産業大学 むすびわざ館. 2022年12月4日
9. 島憲男「構文と『知覚者』：宮沢賢治のドイツ語訳テキストを中心に」京都産業大学ことばの科学研究センター令和4年度第6回研究会. 京都産業大学. 2022年11月30日
10. 島憲男 「宮沢賢治の作品から考える日本語とドイツ語の『擬音語・擬声語』表現」京都産業大学ことばの

科学研究センター開設記念講演会「ことばの不思議 ～日本語と世界の言語～」. 京都産業大学 むすびわざ館.
2022 年 12 月 4 日

11. 鈴木孝明「実験で探る子どものことば」京都産業大学ことばの科学研究センター開設記念講演会「ことばの不思議 ～日本語と世界の言語～」. 京都産業大学 むすびわざ館. 2022 年 12 月 4 日
12. 森博達「上代の漢文－正格と変格－」京都産業大学ことばの科学研究センター令和 4 年度第 2 回研究会. 京都産業大学. 2022 年 6 月 29 日
13. 森博達「復元音で読む日中の古典－卑弥呼から徒然草まで」京都産業大学ことばの科学研究センター開設記念講演会「ことばの不思議 ～日本語と世界の言語～」. 京都産業大学 むすびわざ館. 2022 年 12 月 4 日
14. Yoshida, Kazuhiko “The Hittite Third Plural Preterites in *-ĭaer*.” The 41st East Coast Indo-European Conference. 2022 年 6 月 24 日. ハーバード大学
15. 吉田和彦「アナトリア祖語とモーラ」ことばの科学研究センター令和 4 年度第 3 回研究会. 2022 年 7 月 27 日. 京都産業大学

(4) その他

Center for Language Studies: Annual Report of Research Activities 2022-2023

Kazuhiko YOSHIDA

Shigeki KAJI

Makimi KANO

Mitsushi KITAJO

Norio SHIMA

Takaaki SUZUKI

Hiromichi MORI

Abstract

The Center for Language Studies was established as one of the research centers in the Institute of Comprehensive Academic Research of Kyoto Sangyo University in 2020. The center makes efforts to comprehensive research of languages of the world from both a synchronic and diachronic perspectives. Of special relevance to our research activities are mechanism of language change, field linguistics, syntactic and semantic properties of verbs, text linguistics, language acquisition of children, and language contact. During the academic year 2022-2023 we had productive discussions towards the progress of our research by holding seven workshops.

Keywords : descriptive linguistics, comparative linguistics, syntax, text linguistics, psycholinguistics, language contact, history of cultural negotiations.

